

幼馴染の王女様の方が大切な婚約者は要らない。

愛してる？　もう興味ありません。2



カテリーナ

スフィリル帝国一の女騎士。
今はセリーナの
専属護衛。

ルドルフ

クリフの兄。
王となったクリフに
冷たく接するが……？

カシム

クリフの兄。
南の国アシュタリアの
姫を母に持つ。

レイビス

グランディ王国の王太子。
セリーナに振り回されているが、
いざという時は頼りになる。

クリフ

ガレスタ王国の
新たな国王。
まだ八歳の幼い少年。

ミアナ

クリフの婚約者。
彼を心配して
セリーナを頼る。

セリーナ

貧乏子爵令嬢あらため、
グランディ王国の次期王妃。
持ち前の行動力で
人助けに奔走する。

◆◆◆ 登場人物紹介

CHARACTERS

プロローグ 白銀の世界

「わあ！ 一面真っ白ですね。白銀の世界……なんて美しいのでしょうか」

馬車の窓を開けて外を見ると、辺り一面に雪が降り積もっていた。
美しい景色に心が躍る。

雪を見るのは初めてではないけれど、こんな見渡す限りの雪景色は初めてだ。

「雪にはしゃぐセリーナも可愛いな」

そう言われて、頬が熱くなる。

レイビス様と婚約をしてからだいぶ経つというのに、彼に可愛いと言われるのは、いつまで経っても慣れない。

「殿下。お顔がにやけすぎて気持ちが悪いです」

馬に乗って馬車に並走していたカタリーナが、開いた窓からこちらを覗き込む。

カタリーナは、スフィリル帝国の皇帝である叔父様が私のためにつけてくれた護衛だ。彼女は私がグランディ王国に嫁ぐことが決まった今も、私の護衛を続けることを選んでくれた。

「おまえ……シエリルに似てきてないか？ 馬車の中はセリーナとの大切な時間なんだ。邪魔をす

るな」

レイビス様の双子の妹シェリルは、私にとっても大切な友達。

今は私の生まれ育った国グルダで、国王ルギウス様の婚約者として忙しい毎日を送っている。

「そうはいきません。セリーナの安全を守ることが私の使命なのです。殿下とご一緒の馬車の中は、危険がいっぱいなのです」

馬を走らせながら、馬車の窓にさらに顔を近づけるカタリーナ。とても器用だと感心してしまう。

「俺がセリーナを危険にさらすとしても?」

「殿下ご自身が危険なのです」

グランディ王国を出発してから、二人はずっとこの調子だ。飽きないのが不思議に思える。

二人が言い合う声を聞くのにも慣れてきて、長旅の疲れからか眠気が襲ってきた。

目を開けていられなくて、ゆっくりまぶたを閉じる。

このまま、眠ってしまいそうだ。

「このままだとセリーナが風邪をひいてしまう。窓を閉めるぞ。カタリーナ、王城につくまで気を抜くな」

「承知しております。お任せください」

そんな二人のやりとりが聞こえる。

馬車に揺られながら、いつの間にか私は眠っていた。

私たちは今、大陸の北の国、ガレスタ王国へ向かっている。

こうして心から笑えているのも、レイビス様に出会ったおかげだ。

彼に出会っていなかったら、私は今もまだ、グルダ王国で辛い日々を送っていたことだろう。

貧乏子爵家に生まれた私には、婚約者がいた。けれど彼は私よりも、幼馴染であるクリステイ王女のことばかりを優先し、いつも私は二の次だった。

そしてクリステイ王女も私を目の敵めかたぎにしていたから、学園の中に私の味方は誰もいなかった。

そんな日々嫌気が差して、自ら婚約解消を突きつけたのだけだ……

クリステイ王女を退けることができたのは、レイビス様たちに出会ったから。

隣国グランディ王国からやってきた双子の兄妹、レイビス様とシェリルとの出会いで、私は自分が大陸一の大帝国、スフィリル帝国皇帝の血を引いていることを知った。

レイビス様とシェリル、それからスフィリル帝国の皇帝である叔父様と、叔父様が私の護衛につけてくれたカタリーナのおかげで、それまでたくさんの人を傷つけてきたクリステイ王女はもう、誰にも手出しができなくなった。

私がスフィリル帝国の皇女だと聞いた時は、なにかの間違いだと本当に驚いたのを覚えている。

だって貧乏子爵家生まれの私は、学園ですつとバカにされてきたのだから。

けれど、自分の家のことを卑屈ひくに思ったことはない。

領民の幸せを一番に考えるお父様を、私は尊敬している。

そんなお父様と叔父様の許しを得て、私はレイビス様と婚約したのだけだ……

一カ月半ほど前のこと。

私とレイビス様は、グランディ王国の国王陛下に呼び出された。

「レイビス、そしてセリーナ。おまえたちには、ガレスタ王国へ向かってもらいたい」

陛下に頼まれたのは、ガレスタ王国との外交。

レイビス様の婚約者としてグランディ王国に来て七カ月、まだまだ王妃教育は続いている。陛下は王妃教育を中断してまで、ガレスタ王国に向かってほしいとおっしゃったのだ。

ガレスタ王国はグランディ王国と友好関係にある、北の小国。

先日国王が亡くなって、新たに国王として即位したのはまだ八歳の男の子だという。

新国王には二人の兄がいるけれど、二人とも側室の子なのだそう。

それで末弟まへいにもかかわらず、王妃の子が王位を継承したのだ、と。

私の弟、サミユエルよりも幼いガレスタ国王。

今は王太后となった前王妃と宰相が実権を握っているようだ。

この王位継承で、今のガレスタ王国がどんな状況になっているのか……

友好関係を継続していくかを見極めてほしい、というのが私たちに課せられた任務だ。

目を覚ますと、いつの間にかベッドの上で横になっていた。

今日の宿についたのだろう。

顔を上げると、レイビス様が微笑んでいた。

「……眠ってしまいました。申し訳ありません」

「気にすることはないよ。長旅で疲れたんだね。食欲があるなら、食堂に行こうか。この辺りは鍋料理が名物らしいよ」

「行きます！」

鍋料理と聞いて、一気にお腹が空いてきた。

寒い国ならではの、身体が温まる料理に胸が高鳴る。

「セリーナはそう来なくちゃな。行こう」

差し出された手を取ってベッドを降り、宿の一階にある食堂へ向かう。

「なににいたしましたよう？」

恰幅かかぶのいいおばさんが、注文を取りに来た。

「名物の鍋料理をいただこう。それと、おすすめを全部頼む」

「ぜ、全部？ あのこと…鍋料理だけでも、結構な量がありますよ？」

「かまわない。じゃんじゃん持ってきてくれ」

おばさんは目を見開いている。

護衛たちは他のテーブルについているから、このテーブルには私とレイビス様だけ。二人だけでそんなに食べるのか、という驚きなのだろう。

最初に、お肉料理が運ばれてきた。

「わあ！ 美味しそう！」

まずは一口、お肉を切って口に運ぶ。旨味たっぷりな豚肉の脂と濃厚なソースが絡み合って、口全体に広がった。

次に運ばれてきたのは、とろとろの卵料理。口に入れると、一瞬で溶けてしまった。

その次は野菜を溶けるまで煮込んだスープ。野菜の旨味がスープに溶け込んで、塩だけのシンプルな味つけなのにあまりの美味しさに食べる手が止まらなくなる。

その次は焼きたてフルーツパン。甘いフルーツと柔らかいパンの相性が最高だ。

そしていよいよ、メインの鍋料理が運ばれてきた。

大きな鍋にたっぷり野菜とキノコと鳥肉が、トマトベースのスープの中で美味しそうに煮えている。小皿に取り分け、口に運ぶ。

「幸せ〜」

野菜の旨みとお肉の旨みが交互に楽しめる。身体の芯から温まって、あまりの美味しさに頬が落ちた。ちてしまいたい。

「俺がセリーナをそんな顔にできるのは、いつになるだろうな」

レイビス様はこちらを見て、溜め息混じりに呟く。

「レイビス様と一緒に食べているから、さらに美味しく感じるのです。このお肉、美味しいですよ。さあ、レイビス様もたくさん召し上がってください」

レイビス様の小皿に、お肉をたっぷり取り分ける。

一人で食事をしていた頃の寂しさが思い出せないくらい、彼との食事が当たり前になっている。

私がこんなにも幸せなのは、彼がそばにいてくれるからだ。

「セリーナには、一生勝てないだろうな……」

「ふふっ」

全部の料理を残らず平らげ、デザートまで食べた私たちを見て、おばさんは大きな声で笑っていた。そして食べっぷりがよかったと言って、宿を出る時にパンをたくさん持たせてくれた。

もうすぐ目的地であるガレスタ王国の王城だ。

友好国とはいえ、なにがあるかわからない。

まだ婚約者という立場でも、私はグランディ王国の代表として赴くことになる。

王妃教育を受けてきたとはいえ、私は貧乏子爵家育ち。完璧に振る舞えるかは自信がない。

それでも、精一杯やり遂げてみせる。

レイビス様と、グランディ王国のために。

それから馬車を走らせ続け、ようやくガレスタ王国の王都へ到着した。

この国は、ガラス細工や宝石などの装飾品が有名な国。

「お店がたくさん並んでいますね」

「あとで見に来よう。セリーナに似合いそうなものがたくさんあって、楽しみだ！」

私よりも嬉しそうにしているレイビス様が、とても可愛い。

街並みを見ながら、ゆつくりと馬車は進んでいく。

やがて、王城の門が見えてきた。

雪国の王城だからか、真っ白なお城は荘厳で、とても美しい。あまりの美しさに見入ってしまった

けれど、浮かれている場合ではないと気合を入れる。

初めての国で、王太子であるレイビス様の婚約者としての初めての仕事。

不安はあるけれど、彼と一緒に大丈夫だと思える。

「セリーナ、行こう」

差し出されたレイビス様の手を取って、ガレスタ王国の王城へ足を踏み入れた。

「遠いところをお越しいただき、ありがとうございます。さぞお疲れでしょう。お部屋の用意は整っておりますので、お寛ぎください」

私たちを出迎えてくれたのは、ガレスタ王国の宰相であるコール・ダベルン公爵だった。

衛兵や従者を当然のように引き連れた公爵の姿は、さながらこの国の王のようにすら見える。

「陛下にご挨拶をさせていただけますか？」

「申し訳ございません。陛下はただいま、会議中でして……」

ダベルン公爵は、いかにも申し訳なさそうな表情を浮かべた。

なんだか、違和感を覚える。

自分で言うのもなんだけれど、グランディ王国は大国だ。

その王太子が訪問すると、先触れは出してははず。その時間に会議の予定を入れるだろうか。

いかに政権を握っている宰相だといっても、こうした場に出るのは国王の役目のはず。

というか、実権を握っているからこそ会議に出る役割は宰相が担い、賓客の出迎えには幼い国王

が、とするほうが自然なように思える。

新国王陛下に会わせたくない理由でも、あるのだろうか。

「……そうか。では、部屋に案内を頼む」

レイビス様も不審に思ったのだろう。怪訝な表情を浮かべている。

けれど今はなにを言っても無駄だと判断したようで、私たちは素直に城の中を進んだ。

メイドに部屋へ案内され、私の侍女メーガンが荷解きを始める。
案内された部屋はとても豪華だった。

雪国らしく大きな暖炉があり、部屋の中は暖かく整えられている。
レイビス様の部屋は隣だけれど、続き部屋になっていて、部屋の中にある扉で行き来ができる。
隅々まで気を遣っているのがわかる部屋で、とても心地いい。

先ほどのダベルン公爵の態度を見る限り大歓迎とはいかなくても、歓迎はされているような気がする。けれど、そう思うとますます不思議だ。

歓迎はしているのに、陛下には会わせない。私たちに会わせたくないのか、それとも国王陛下を外に出したくないのか……

「この扉は開かないように鍵をかけておこう」

カタリーナがレイビス様の部屋に続く扉に鍵をかけようとしていた。

「カタリーナ、やめて。そんなことをしたら、レイビス様が泣いてしまうわ」

その時、扉の向こうからレイビス様の声が聞こえた。

「なんだ？ 開かないぞ？ 壊れているのか？ セリーナ！ セリーナ、そこにいるのか？」

カタリーナはすでに鍵をかけてしまっていたようだ。

「……開けてさしあげて」

仕方なく扉を開けるカタリーナ。深い溜め息までついている。

「鍵をかけたのか!？」

「セリーナをお守りするためです。今は仕方がないので開けましたが、無闇にこちらの部屋へいらつしやらないようお願いします」

「レイビス様もカタリーナも、やめてください。今はそんなことで揉めている場合ではないでしょう？ これからのことを話し合わないと」

二人が叱られた子犬のように大人しくなったところで、ソファアに座り、メーガンが用意してくれたお茶をいただきながら話し合いを始める。

「思っていた以上に、宰相の権力が強いように感じました」

「セリーナもそう感じたか。……権力が一つのところに集まるのは危険だ。それが王家の人間なら誰も異を唱えられなくなるから、側近がある程度の力を持つことは悪いことじゃない。だが……王太后の子である新国王は国を治めるにはまだ幼い。それを利用しようと考え人間がいても、おかしくはないだろうな」

「お会いできたのは宰相だけです。まだ情報が足りませんね」

その時、部屋の扉がノックされた。

扉を開けると、そこには小さな女の子が一人で立っていた。

「グランディ王国のレイビス王太子殿下とセリーナ様がいらつしやるとうかがい、ご挨拶にまいりました。わたくし、クリフ陛下の婚約者、ミアアナ・ダベルンと申します」

可憐なドレスを着た女の子は、優雅にカーテシーを披露する。

『ダベルン』ということは、宰相の娘なのだろうか。

娘を国王の婚約者に据えているとなると、ますます宰相が権力を握っていることを感じる。

「ミリアナ嬢、わざわざありがとうございます」

「お二人にお目にかかれて、嬉しいですね」

こんなに幼いのに、しっかりしている。歳は七、八歳くらいだろうか。金色の髪がまるで雲みたいにふわふわで、可愛らしい。

「はじめまして、ミリアナ様。堅苦しい挨拶はここまでにして、ご一緒にお茶をいかがですか？ 美味しいお菓子があるのですが」

「ご一緒したいです！」

お菓子と聞いて、ミリアナ様は大きな紫色の目を輝かせた。

しっかりして見えるけれど、こういうところは子供のようだ。

部屋に招き入れ、メーガンにミリアナ様の分のお茶を用意してもらった。

彼女はお茶を飲みながら、なぜかチラチラと私を見ている。

「なにかついていきますか？」

「あ、いえ……あの……」

先ほどあんなにきちんと挨拶をしていたミリアナ様はどこに行ってしまったのか、私を見て怯えるように震えている。

「このお菓子、とっても美味しいですよ。どうぞ」

「は、はい！」

レイビス様もミリアナ様のことが気になっているようで、様子をうかがうように視線をやっている。

でも、もしかしてこの反応……

「私が、怖いのですか？」

「ご、ご、ごめんなさい！ セリーナ様は、大帝国の貴族たちを震え上がらせた方だとお聞きしました！ お、お許してください！」

うそ……私、そんな風に言われているの!?

「ふっ……あははははっ」

レイビス様は、声を上げて笑い出した。そんなレイビス様を思いきり睨みつける。

「心配はいらない。セリーナは、誰よりも優しい人だよ。それはミリアナ嬢にも、すぐにわかるはずだ」

嬉しいことを言ってくれたから、今回は許してあげよう。

こんなに私を怖がっているミリアナ様がお茶の誘いを受けてくれたのは、なにか理由があるに違いない。

「ミリアナ様。私たちになにかお話があるのでは？」

「セリーナ様……どうして？」

目を丸くするミリアナ様。思った通り、なにかあるようだ。

「う……う……うわーん！」

ミリアナ様はなにかを言おうとしたけれど、いきなり泣き出してしまった。泣きじやくるミリアナ様の背中を優しくさすりながら、彼女が落ち着くのを待つ。

事情はわからないけれど、こんなに幼い子が悩んでいるのなら、力になってあげたい。それからしばらく泣いた後、ミリアナ様はぼつりぼつりと話しはじめた。

「……取り乱してしまって、申し訳ありませんでした。わたくし、どうしたらいいかわからず……。セリーナ様……お願いです！ クリフ様を助けてください！」

ミリアナ様は大きな瞳を潤ませながら、私の目を真っ直ぐ見つめてそう言った。

ミリアナ様によると、最近このガレスタ王国の新国王であるクリフ陛下のご様子がおかしいのだそうだ。

二人が婚約したのは、クリフ陛下が三歳、ミリアナ様が二歳の時。

ミリアナ様は五歳の時から、この王城に住んでいるという。

「先王様がお亡くなりになってクリフ様が即位されてから、わたくしはクリフ様の笑顔を一度も見ていません。あんなによくお笑いになる方だったのに。わたくし、クリフ様が心配で……」

「ミリアナ様は、クリフ陛下のことが大好きなのですね」

「え……!? そ、そ、そんなこと……」

真っ赤に染まった頬を両手で隠すミリアナ様。とても可愛らしい。

即位してから笑わなくなったというクリフ陛下。八歳で即位されてから三カ月、公務が忙しくて

疲れているだけかもしれないし、国王としての責任感と思えば、不思議なことではないと思う。

けれど、そう思えない理由が彼女にはあるのかもしれない。

「ミリアナ様、クリフ陛下はどのような方ですか？」

「とってもお優しい方ですわ！」

クリフ陛下の話をするミリアナ様は、お菓子を見た時と同じように目を輝かせていた。

まだこの国の内情は把握できていない。

私たちは部外者で、ただ友好関係にある国の人間でしかない。

不用意に首を突っ込んだ結果、友好関係にヒビが入ってしまうことだってありえる。

それでも、どのような理由があるにしても、幼い陛下から消えてしまった笑顔を取り戻してさしあげたい。

レイビス様の顔を見ると、彼は穏やかな表情でうなずいてくれた。きっと、レイビス様も同じ気持ちなのだ。

「私たちになにができるかはわかりませんが、やれるだけのことをしてみますね」

「セリーナ様……いいえ、セリーナお姉様！ ありがとうございます！」

「おね……!?」

「お姉様と呼ばせてください！ わたくしのことは、どうかミリアナと」

「は……はい……」

ミリアナの勢いに押されて、受け入れてしまった。

そんな私たちを見て、レイビス様はまた笑っている。ミリアナはお菓子をたくさん抱えて自室へ戻っていった。

王城に辿りつくまでに寄った街や村で、お菓子を買い込んできて正解だった。

「レイビス様、ずいぶん楽しそうでしたね」

唇を尖らせながら文句を言う。

「やはり、セリーナはすごいなと思ったたら嬉しくてね」

「なにがですか？」

「あの子、最初はあんなにセリーナを怖がっていたのに、すぐに懐いてしまった。さすが俺の婚約者だ」

レイビス様は悪戯つぼく笑う。

褒められている気がしないのだけれど、これがレイビス様なのだと諦めることにした。

その日は結局、クリフ陛下にお会いすることはできなかった。

宰相の話によると、明日、王城で舞踏会が開かれる。そこでご挨拶することができるようだ。

私たちが歓迎するための舞踏会……ではなく、三方月に一度開かれる、ガレスタ王家と貴族たちの交流の場なのだという。

「レイビス様、もしかして狙ってました？」

たくさんの貴族たちと会うことができる舞踏会が、都合よく到着した翌日に開かれるなんて。

レイビス様のことから、その日に間に合うように移動の日程を調整していたのではないだろうか。

「これでも、グランディ王国の王太子だからな」

得意げなレイビス様。まるで、シェリルを見ているようで頼もしい。

彼が頼もしくなかったというわけではないけれど、シェリルの情報網と用意周到さは並外れていた。

「レイビス様、まるでシェリルのようですね」

「セリーナ……それは、全く嬉しくない！」

「殿下、今回ばかりは同情いたします」

なぜか拗ねてしまったレイビス様を、カタリーナが慰めている。

私、なにか悪いことを言ってしまったのだろうか。

そして舞踏会当日。

鏡の中の自分を見ながら気合を入れる。

「頑張らなきゃ！」

社交の場は、何度参加しても好きになれそうにない。

誰も本心を見せることのない、上辺だけの会話が繰り返られる場所。

けれど、この国のことを知るのに絶好の機会だ。



「セリーナ……今日も綺麗だ。こんなに美しい婚約者がいて、俺は世界一の幸せ者だよ」
迎えに来てくれたレイビス様が、とろけるほど甘い言葉で褒めてくれる。

今日のドレスはレイビス様を選んでくれたものだ。赤を基調に白いフリルがあしらわれた上品な
ドレスで、締め色に使われた黒が大人っぽい雰囲気を出している。
彼のエスコートで、舞踏会が開かれているホールへ足を踏み入れた。

「……視線が痛いですね」

私たちがホールへ入ると、皆が一斉にこちらを向いた。
私たちが来ることは、知らされていなかったようだ。

「気にしないでいい。まずは、陛下にご挨拶に行こうか」
少し怖気おびづいてしまったことが恥はずかしい。

一方のレイビス様はとも堂々としている。

私はそんな彼の婚約者だ。私も、堂々としているよう。

ホールの真ん中にダンスフロアがあり、正面には王族が勢揃いしている。

クリフ陛下とミリアナ、そして王太后様は椅子に腰を下ろし、その後ろに宰相。クリフ陛下の横
に立っている二人は、兄のルドルフ殿下とカシム殿下だ。

「陛下、本日はお招きいただきありがとうございます」

「遠い北の地までお越しくださり、深く感謝を申し上げます。なにもないところですが、どうか楽しんでいってください」

クリフ陛下に挨拶をすると、返ってきたのは、まるで言わされているかのような、感情のこもっていない言葉だった。

陛下の表情は、まるで人形のように硬く、冷たい。

ミリアナの言っていた『様子がおかしい』という言葉の意味がよくわかった気がする。

「お二人とも、お美しく見てとれてしまいますな。お二人のダンスを見せていただけませんか？」

ほんの一言挨拶を交わしただけで、宰相が割って入ってきた。これ以上、陛下と話すなど言わんばかりだ。

「ええ、そうですね。レイビス様、行きましょう」

どこか険しい表情のレイビス様の腕を引き、その場を後にすることにした。

それから二人でダンスフロアへ向かい、美しい音楽に合わせてゆっくりと踊りはじめる。

「……セリーナ、すまない」

「謝る必要はありません。陛下のお姿を見て、レイビス様も怒っているのがわかって嬉しかったです」

こういう時、彼はいつも冷静で、取り乱すのは私のほうだった。

こんな彼を見るのは新鮮で、なんだか嬉しい。

「ありがとう、セリーナ。君がいてくれて心強いよ」

「レイビス様がいてくれるから、私は強くいられるのです」

舞踏会はまだ始まったばかりだ。

陛下ときちんとお話することはできなかったけれど、他にも話したい相手はたくさんいる。けれど今は、大好きな人とのダンスを楽しもう。

ダンスを終えると、盛大な拍手に包まれた。

そしてなぜか私たちは、貴族たちに囲まれていた。

「とても素敵なダンスでした！」

「グランディ王国のレイビス殿下とセリーナ様ですよね？ お会いできて光栄です！」

「セリーナ様、私……大ファンです！」

思っていた反応と違って、驚いて言葉を失うばかりだった。

「あ……りがとうございます」

「奴隷問題を解決なさったのは、セリーナ様だとうかがいましたわ！ 実はこの国でも村が襲われて子供たちが攫われることがあって……本当に感謝しています」

「私はなにもしていません。解決してくださったのは皇帝陛下ですから」

貴族たちにもみくちやにされて、どうしようかと思っていた時。

パンパンと手を叩く音が聞こえた。

「皆さん、それくらいになさってください。お二人が困っていらっしやいますよ」

クリフ陛下の兄、カシム殿下だ。

彼は、お母様が南の国アシュタリアの出身で、北の国には珍しい褐色の肌をしている。グレーの

長い髪はどこか陰を感じさせて、知的な雰囲気だった。

お母様は、三年前にご病気で亡くなったと聞いている。

「申し訳ありません。お二人にお会いできて、つい興奮してしまいましたわ」

「ぜひまたお話を聞かせてくださいね」

「それでは、失礼いたします」

貴族たちはそそくさと離れていった。

「カシム殿下、ありがとうございます」

彼のおかげで、ようやく解放してもらえた。そしてなにより、王族の方とようやく話ができる絶好の機会だ。レイビス様もそう思ったのか、少し嬉しそうにしている。

「いえいえ、皆も悪気はないので許してやってください。レイビス殿下とセリーナ嬢のご活躍は、このような小さな国にも届いておりますから」

カシム殿下はどこか含みのある微笑みを浮かべた。

この様子だと、私がグルダ王国の王女クリステイ様を悪名高いルツォリオ陛下に嫁がせたことも、ご存じなのだろう。

ミリアナが私を怖がっていたように、この国で私は悪魔のように思われていないか不安になってきた。

「レイビス殿下は素晴らしい婚約者に恵まれて、羨ましいことです」

社交辞令のような言葉だけれど、そう言ったカシム殿下は、どこか寂しげな表情をしたように見

えた。

「そうなのです！ セリーナは私にはもつたないほど素晴らしい女性です」

「レイビス様、おやめください！ お世辞を真に受けて惚^{のろけ}気るものではありませんよ。カシム殿下がお困りになっていらつしやるではありませんか」

「事実を言っただけが悪い。セリーナ、照れているのか？」

レイビス様は誰を前にしても、こうして私のことを褒める。嬉しいけれど、恥ずかしすぎる。

こういう時、シエリルがいてくれたら……

カタリーナはホールの端で警護をしてきているけれど、さすがにこのような場でツツコミを入れたりほしくない。

「あはははっ！ すみません。お二人は本当に仲がよろしいのですね。こちらまで幸せな気持ちになります。これ以上お二人の邪魔をするわけにはまいりませんので、この辺りで失礼します」

カシム殿下は茶目つ気たつぷりに笑う。さっきの寂しげな表情は、私の気のせいだったのだろうか。

「カシム殿下、よかったですらまたお話をいたしましょう」

「ええ、もちろん」

カシム殿下は颯^{さつ}爽と去っていった。

とても好印象な方だ。笑われてしまったけれど。

それから、私たちから離れたカシム殿下は護衛らしき男性に話しかけられていた。他の護衛と比

べると服装が少し華美だ。特別な側近なのだろうか。

先ほどまでの明るい様子とは違い、険しい表情をしているように見える。なにかあったのかと思つて様子をうかがっている時、護衛と目が合った。

護衛は一瞬だけ気まずそうにしたかと思うと、殿下に目配せをしてからその場を離れ、殿下のほうは再び貴族たちと楽しそうに会話しはじめた。

「なにか気になるのか？」

レイビス様が、小声でそう聞く。

「いえ、なんでもありません」

なにか気になるかと聞かれても、具体的におかしなことがあるわけではなかった。

ただ、なんとなく気になるかしら……

はつきりしないことで、レイビス様を煩^{わづら}わせたくはない。気にするのはやめよう。

「そういえば、ルドルフ殿下はどちらにいらっしゃるのでしょうか？」

ホール内を見渡すが、クリフ様のもう一人の兄君、ルドルフ殿下の姿は見当たらなかった。

仕方がないので、貴族たちはこの国の内情について探りを入れることにする。

ルドルフ殿下のお母様はこの国の公爵家出身で、王太后様のご実家とは敵対関係にあるそうだ。

けれどルドルフ殿下を産んですぐに、お母様はお亡くなりになったという。

ルドルフ様を得たことで公爵家はある程度の発言権を得たけれど、王太后様がクリフ陛下を産んだことで力関係は大きく変わった。長兄ではあつても、お母様のいないルドルフ殿下の立場は不安

定だ。

それに加えて、宰相は王太后様の派閥。結果的に王位を継承したのが八歳の男の子となると、今の王城内での力関係は実にわかりやすい。

先王様が亡くなった後、ルドルフ殿下とカシム殿下は公爵位^{たかむ}を賜^{たま}ったけれど、それは領地もない名ばかりの爵位だという。

それぞれ立場が大きく異なる三人の兄弟。

彼らはお互いに、なにを思っているのだろう。

クリフ陛下を私たちと関わらせまいとする宰相の動きも気になる。王太后様の派閥がこのまま権力を自分たちを集めるつもりなら、クリフ陛下の兄たちは目の上のたんこぶだ。

誰も話してくれないかとも思っていたけれど、貴族たちからは様々な話を聞くことができた。

カシム殿下はクリフ陛下に優しく、権力にもあまり興味がない様子なのだそうだ。

一方、ルドルフ殿下はカシム殿下とは違って、年の離れた弟に対してとても冷たいという。

クリフ陛下さえいなければ自分が王になれたかもしれないという立場なのだから、よく思っていないかとも当然かもしれないけれど……

噂や憶測だけでは、本当のことなんてわからない。

ルドルフ殿下と直接お話ししたかったけれど、舞踏会が終わるまで、彼を見つけることはできなかった。

「このままガレスタとの友好関係を続けて問題ない……とは、まだ判断できないな」
舞踏会が終わり、私の部屋で今後のことを話し合う。

貴族たちは私たちと友好的に接してくれて、グランディ王国にも悪い印象は持っていないようだった。

ガレスタ王国と友好関係を続けることは、こちらにもたくさん利点がある。

ガレスタ王国で作られるガラス細工や装飾品は世界的に人気があり、武器や防具なども優れたものばかりだ。今はそれらを優先的に輸出してもらっている。

「そうですね。クリフ陛下が即位して三カ月、まだ国は安定していません。それにミアナの言っていた通り、陛下のご様子がおかしいのも気になります」

情報は増えたけれど、結論を出すにはまだ足りない。

私たちが話し合いをしていると、部屋の扉がノックされた。

訪ねてきたのは、ミアナだ。

「遅くにごめんなさい。レイビス殿下とセリーナお姉様に、お会いしてほしい方がいるのです」

「お会いしてほしい方？」

私が尋ねると、彼女はもの言いたげにこちらを見つめる。けれど、『お会いしてほしい方』が誰なのかは言わなかった。

それでもミアナが言うのならと思い、レイビス様の顔を見る。

彼は優しく微笑み、うなずいてくれた。レイビス様は、私の気持ちをよくわかっている。

「会いに行きましょう」

そう答えると、ミアナは顔をくしゃくしゃにして笑った。

案内されたのは、大きな書斎だった。

まるで図書館のように本棚が立ち並び、びっしりと本が詰め込まれている。

ミアナはランタンを持ち、書斎の奥へ進んでいく。

「暗いので、足元にお気をつけください」

この子は本当に七歳なのかと思うほど、しっかりしている。弟のサミュエルのほうが、よっぽど内面が幼い。サミュエルはあれで可愛いものだけれど、ミアナのようにもう少ししっかりしてくれたらと思う。

「このようなところにお呼びしてしまい、申し訳ありません」

聞こえてきたのは、小さな男の子の——クリフ陛下の声だった。

「クリフ陛下……」

書斎の奥、陛下はたった一人で隠れるように佇たずんでいた。

「クリフ様に、セリーナお姉様のことをお話したのです。それで、クリフ様もお話してみたいとおっしゃったので」

嬉しそうに話すミアナが可愛い。クリフ陛下のことが大好きなのだ、顔に書いてある。

「お二人には挨拶もろくにできず、大変失礼いたしました。僕がなにもできない王で、失望したこ

とでしよう……」

「そのようなことはありません。陛下は、とてもしつかりなさっていると思います」

今ここにいるクリフ陛下は、先ほどの人形のような表情とは違い、八歳の男の子の顔をしていた。もしかしたら感情を失うほどの辛い目に遭ったのではと心配していたけれど、杞憂きゆうだったようだ。

「陛下……。あの、クリフと呼んではいただけませんか？ 僕はお二人と友達になりたいです！」
切実な響きだった。

この子はきつと、寂しかったんだ。

「友達か。わかった。クリフ、俺のことはレイビスと」

「レイビス様!? 呼び捨てはさすがに……」

クリフ陛下の前だというのに、レイビス様は私たちと過ごしている時のレイビス様に戻っていた。いくら幼いとはいえ、相手は他国の国王陛下だ。

「かまいません！ 僕、とても嬉しいです」

「クリフもこう言ってるし、ここには俺たちしかない。一名ほど、心配でついできた騎士がいるけど、気にしなくてもいい」

レイビス様が目を向けた先には、カタリーナが立っていた。彼女はなにも反応を見せず、こちらのことは見えていないように振る舞っている。

「では、私はクリフ様と……私のことは、セリーナとお呼びください」

「ありがとうございます。あのね……レイビス、セリーナ、相談してもいい？」

上目遣いで、大きな青い瞳を潤ませながら私たちを見るクリフ様。天使のような可愛さに、胸がキュンとなる。

「もちろん！」

そのたった一言で、クリフ様は無邪気な笑みを見せてくれた。

ミアアナはクリフ様が笑わなくなったと悩んでいたけれど、どうやら一つ解決したようだ。

「本当は、国王になんてなりたくなかったんだ。ルドルフ兄上もカシム兄上もいるのに、どうして僕がやらなくちゃいけないの？」

この子はこの子なりに、悩んできたんだ。

人の上に立つことは、責任を伴う。一国の王となれば、その重圧は生半可なまはんかなものではない。

貧乏子爵家に生まれて、まさか自分が王家の一員になるなんて想像もしていなかった私には、それがどれだけ重いものか、よく理解できるつもりだ。

だけどクリフ様が望んでいても、いなくても、もう国王として生きなければならぬ。

「クリフの気持ちをよくわかる。だが、それを受け入れなければ前には進めない。どうして自分がなんて悩む暇があったら、今の自分になにができるのかを考えろ」

グランディ王国の第二王子だったレイビス様。

本当はシオン様というお兄様がいたけれど、レイビス様こそ次期国王にふさわしいと担ぎ上げられそうになって、その優秀さをずっと隠してきた。結局、シオン様が亡くなって王太子になったけれど、王位継承のことで散々悩んできたのだ。

彼は私以上に、クリフ様の気持ちがわかるのだろう。

「なにができるかなんて……わからないよ。誰も僕の言うことなんて聞いてくれない。ただそこに
いるだけの人形になれと、母上にも言われた」

「本当に誰も、クリフ様の言うことなんて聞いてくれませんか？」

私はクリフ様と視線を合わせて問いかけた。

クリフ様の隣で、泣きそうな顔をしているミリアナ。この子はずっと、クリフ様のことを想って
きたはず。

「ミリアナは私たちの部屋を訪ねてきて、クリフ様を助けてほしいと言いました。私のことを怖
がっていたのに、こんなに小さな女の子が勇気を出したのです」

「わたくし、クリフ様の笑顔が見たくて……」

「……ありがとう、ミリアナ」

ミリアナを見るクリフ様の表情は、男の子の顔だ。こんなに幼くても、二人はお互いを想い合っ
ている。

「クリフ様は、ミリアナが大切なのですわね」

「うん。僕はミリアナが好き！」

清々しいほどのはっきりした告白。クリフ様は、レイビス様に似ているような気がした。

「クリフ様……あの……わたくし……恥ずかしいですわ」

「ミリアナは違うの？」

「違うはずありませんわ！ 好きに決まっています！」

恥ずかしそうではあるけれど、ミリアナもはっきりと言いつつ切った。

まだ幼いけれど、この二人なら大丈夫だ。

「守るべき人がいると、人は強くなれます。小さな一歩からで、いいではありませんか。あなたは
ガレスタ王国の国王陛下です。自信を持ってください」

「セリーナ、ありがとう。僕はミリアナを守りたい。僕になにができるかわからないけど、この国
のことも大好きだし、守りたいと思ってる。不思議だね、セリーナに言われると、自信が持てるよ
うな気がする」

国王といっても、まだまだ子供だ。いきなり大人になてなれない。だから、今できることを少
しずつやるしかない。

いつかこの子は、良い国王になれると思う。

「レイビス、セリーナ、また話せる？ 次はセリーナの武勇伝を聞きたい」

「武勇伝ってなんですか!？」

「セリーナの武勇伝……あはははっ」

レイビス様が笑い出した。彼は私の話になるといつも笑う。

思いっきり彼を睨みつけると、クリフ様とミリアナが目を見開いてカタカタと震えはじめた。
また怖がらせてしまったようだ。

「クリフ様、ミリアナ、私に武勇伝なんてありませんよ」

「でも、奴隷商人を目にも留まらぬ速さで倒したと皆が話してた」

怯えながらも、クリフ様はとんでもないことを言い出した。

「それは私ではなく、そこにいるカタリーナです。彼女はスフィリル帝国一の騎士なのですよ」
スフィリル帝国一の騎士と聞いて、二人は目を輝かせてカタリーナを見る。

「すごいですね！ 大帝国一の騎士が、女の人だなんて！」

「わたくし、カタリーナ様のこともセリーナお姉様と同じくらい尊敬いたします！」

「私は、セリーナ様をお守りするためなんでも斬ります。そこにいるダメ殿下でも、容赦なくいきます」

「おい！ 誰がダメ殿下だ！」

「レイビス殿下以外、どこにダメ殿下がいるのでしょうか？」

「まあ！ セリーナお姉様をお守りする騎士様なんて、素敵です！」

「僕だって、ミアアナを守る！」

「嬉しいですわ、クリフ様」

このままではいつまで経っても話が終わりそうにない。

クリフ様の笑顔を見ることができて、ミアアナは嬉しそだった。

これで全てうまくいく……なんてことはないだろうけれど、今は楽しそうな皆の顔を見ていようと思った。

「誰かいるのか？」

廊下から男性の声が出た。

さすがに、少し騒ぎすぎてしまったらしい。

「隠れて！」

クリフ様が、本柵の後ろを指し示した。

国王がこんな遅い時間に他国の王太子と密かに会っていると知れたら、問題になるかもしれない。

私たちは言われた通り、本柵の後ろで息をひそめた。

「クリフ？ 夜分にこのようなところで、なにをしている？」

「最近ミアアナと過ごす時間がなかったから……二人で会いたくて」

「ルドルフ様、お騒がせしてしまい申し訳ありません。私がクリフ様とお会いしたいとわがままを

言ってしまったの」

入ってきたのは、ルドルフ殿下だった。

先ほどまで楽しそうだった二人が、緊張のあまり今にも震え出しそうだ。

「……おまえは国王だ。軽率な行動は、慎め」

「申し訳ありません。これからは、気をつけます」

ルドルフ殿下はクリフ様に注意して、書斎から出ていった。

気のせいだろうか……、私たちに気づいていたように思えた。

「部屋に、戻りましょうか」

その日は、そのまま解散になった。

一日を無事に終えて、ベッドに横になる。
今日は色々なことがあって、少し疲れてしまった。
貴族たちが言うには、ルドルフ殿下はクリフ様に冷たいという話だ。
けれど、なぜか私はそう感じなかった。

翌日、シェリルから手紙が届いた。
嬉しくて早速読みはじめた。

『セリーナ、元氣？ セリーナとお兄様がガレスタ王国に行く聞いて、手紙を書いたの。本当はまたこっそりガレスタ王国に行つて驚かせたかったのだけれど、さすがに今はグルダを離れることができそうにないわ。すつごく残念だけど、お兄様の顔を見ながら私のことを思い出して我慢してね』

「シェリルは変わらないな。さすがにレイビス様を見ながらシェリルを想像することはできないけれど……」

手紙を読んで、嬉しい気持ちと寂しい気持ちがちやまぜになっていた。

シェリルに会いたい気持ちは、ものすごくある。

今も、部屋の扉を開けたらいつものように『来ちゃった！』と笑ってくれるんじゃないかと期待してしまふくらいだ。

けれど、今のグルダはルギウス様が国王となり、シェリルはルギウス様を支えるために頑張っている。そんな忙しい毎日の中で、私たちの心配までしてくれるシェリルにはただただ感謝しかない。

午後になり、私たちは街へ出かけることになった。

国民の話を聞くのが目的なのだけれど、可愛いお店を巡つてこの国の特産であるガラス細工や宝石などを見て、ただ純粋に楽しんでた。

「これも可愛いです！ あれも素敵ですね」

「それなら全部買おう！」

「レイビス様、そのような贅沢はいけません。お気持ちだけで結構です」

レイビス様なら、本当に全部買ってしまえそうだ。

二人で買い物を楽しんでいると、普通の恋人同士みたいで嬉しくなる。

ここでは、私たちのことを知る人はほとんどいない。ただ好きな人と一緒に過ごせることが嬉しくて、余計にはしゃいでしまう。

「セリーナは欲がないな。俺はセリーナが喜ぶことはなんだってしたい。目一杯甘やかして、俺がいないとダメなくらいにさせたい」

不意にそんなことを言われて、胸の鼓動が速くなる。

そんなこと言われるまでもなく、私はレイビス様がいないとダメなのに。

なにも言えず、恥ずかしくてうつむいていると、レイビス様の顔が近づいてきた。

「誰も俺たちを気にしていないみたいだから、ここでキスしていい？」

耳元でそう囁かれ、顔が爆発してしまうのではないかと思えるほど熱くなる。

「な、な、なをおっしやっているのですか!？」

キ、キ、キ、キスなんて、こんなところで……

心の声まで動揺してしまうほど、恥ずかしさでいっぱいだった。

「ご、ご、ご、護衛が見ているではありませんか！ そのような冗談は、おやめください」

「残念。護衛が見てないときにしようね」

本当に残念そうな表情を浮かべながら、私から離れていくレイビス様。冗談だと思ったけれど、本気だったのだろうか……

ふとカタリーナのほうを見ると、鬼のような形相でレイビス様を見ていた。

その顔を見ていると、先ほどのドキドキは一気に消え去ってしまった。

買い物を終え、私とレイビス様は別行動をとることになった。

どうしても行きたいところがあるのだそうだ。

私も行きたいところがあつたから、ちょうどよかった。

「これなんかどうかな？」

やってきたのは、武器屋さん。

ずっと護衛をしてきているカタリーナに、剣を贈りたかったのだ。

勝手に選ぶわけにはいかないから、お気に入りの剣を見つけてもらって、私が購入する。

「セリーナ……私はもう、死んでもいい」

いつも冷静なカタリーナが、顔をくしゃくしゃにして泣き出してしまった。

「あなたが死んだら誰が私を守ってくれるの？ 護衛はたくさんいるけれど、私はカタリーナに守ってほしいの」

「セリーナの護衛で、本当によかった……」

さらに泣かせてしまったけれど、私も同じ気持ちだ。

カタリーナが護衛で、本当によかった。

大事そうに剣を抱える姿が可愛い。先ほどのような鬼の形相で、レイビス様にこの剣を向けなければいいのだけれど……

「きつとヤキモチを焼くだろうから、レイビス様にも剣を買おうかな」

なんて言い訳してみるけれど、これは紛れもなく本音だった。

ガレスタ王国の武器は丈夫で切れ味も鋭いと聞く。この国に来ると決まった時から、二人に剣を贈りたいと思っていたのだ。

店内に飾られた剣を見ると、鞘にも細かい細工が施されていて、武器とは思えないほど美しい。

「おじさまは、この国にずっと住んでいるのですか？ 他の国では見えないような素敵な武器ばかりなので、気になってしまいました」

「お？ 素敵だなんて言われたら、サービスしたくなっちゃうね。俺は生まれた時からずっとこの

国育ちさ。先王様がお亡くなりになって、この国がどうなっていくのか心配だがな」

国王になったのがまだ八歳の男の子なのだから、心配になるのは当然のことだろう。

「ルドルフ様もカシム様も国を愛しているから、ご兄弟で国を守っていただくさと信じているがね」

王都の人たちにたくさん話を聞いたけれど、皆、ルドルフ殿下もカシム殿下も国を愛していると言っていた。誰一人として、彼らを悪く言う人はいない。

三人で協力したら、素晴らしい国になる。

それが真実だとして、そんなことが実現できるのだろうか。

レイビス様と合流して王城へ戻ると、なにやら城内が慌ただしかった。

なにかあったのかと、出迎えてくれたメイドに聞いてみる。

「それが……」

「ああ、お二方。お戻りになられたんですね。お騒がせして申し訳ない。陛下がわがままをおっしゃっているのですよ。いつものことなのでお気になさらず」

メイドの話を遮ったのは、宰相のダベルン公爵だった。まるで私たちが帰ってくるのを見計らったようなタイミングだ。

けれど、クリフ様がわがまま？

なにかおかしい。そのような方には見えなかった。

「いつものことなら心配はいらないな。少し疲れた。私たちは部屋で休むことにする」

レイビス様もおかしいと気づいている。けれどここで宰相になにを聞いても、はぐらかされるだけだと判断したのだろう。

「お疲れのところ申し訳ございません。ゆっくりお休みください」

城に戻ったらレイビス様に剣を贈るつもりだったのだけれど、それどころではなくなってしまうようだ。

「一体、なにがあったのでしょうか？」

「ライト、話せ」

ライトは護衛の一人なのだけれど、外出中は姿が見えなかった。

彼はレイビス様の命令で、私たちがいない間に王城内のことを探っていたようだ。

「ルドルフ殿下の食事に毒が盛られた、とのことですよ」

「毒……!? それで、殿下はご無事なのか!?」

「幸い、食される前に発覚しました。今はショックからか、お部屋でお休みになっておられます」皆、一斉にホッと胸を撫で下ろす。

誰かがルドルフ殿下を殺そうとした。

でも、一体なぜ？ 疑問ばかりが増えてくる。

ルドルフ殿下は、国政に関わることができないのが現状だ。

会議にも参加していない。領地も持たず、爵位だけでなんの力も持たない。そんな殿下の命を狙う意味が、本当にあるのだろうか。

「考えられるのは、気に入らない者の排除か……」

「クリフ様に冷たいルドルフ殿下を、宰相と王太后様が亡き者にしようとした、ということですか？」

「ああ」

私たちが知っている情報だけで推測すると、その理由しか考えられない。けれど、違和感がある。

どうして私たちがガレスタ王国に来ているこのタイミングで、そんなことをしたのか。

王兄の暗殺なんてことが私たちのいる間に起きたら、グランディ王国との友好関係にも影響を及ぼしかねない。グランディ王国との関係を白紙にしたいというのならわかるけれど、そんなことをすれば国を危うくするだけだ。

宰相がわざわざ私たちの帰りを待っていたことも気になる。ライトが城に残っていたことは知っていたはずだ。だったら、殿下の毒殺未遂を隠すことができなくてもわかっていたはず。

むしろ、毒殺未遂のことを私たちに見せつけようとしているようにすら思える。動機を考えたら、宰相と王太后様が犯人としか思えない。でも。

私の考えが正しいければ、あの二人は……

「レイビス様、王太后様にお会いできませんか？」

「……頼んでみるよ」

レイビス様は、なにも聞かずに了承してくれた。

正直、今はうまく説明することができない。だから、なにも聞かないでくれるのはとてもありがたかった。

「それと、ライト。もう少し詳しくルドルフ殿下の毒殺未遂の件を調べてほしい」

「はい」

レイビス様が宰相に頼んでくれて、翌日、王太后様にお会いできることになった。

王太后様にお会いすれば、なにかが変わる……とは言いきれない。まだ、私の違和感でしかないのだから。

「緊張してきた……」

緊張を和らげようと、シェリルからの手紙を読み返す。ここにいなくても、シェリルの存在は私に力を与えてくれる。

「……あれ？」

何度も読み返していると、便箋が三枚あることに気づいた。急いで三枚目を読んでみる。

三枚目の便箋には、ガレスタ王国のことが書かれていた。

先王様を中心に、王太后様、クリフ様、ルドルフ様、カシム様、そして宰相のことまで詳細に調べられている。

シエリル……前置きが長すぎて、こんな重要な内容に気づかなかったよ。
「シエリル、ありがとう……」

ガレスタ王国には来たことがないはずなのに、さすがシエリルだ。彼女の情報収集力には、どんな諜報部員でも勝てない気がする。

シエリルのおかげで、自分の考えに自信を持つことができた。
緊張も和らぎ、午後の王太后様との謁見^{えつけん}を待つ。

時間になり、私たちは王太后様の待つ会議室へ案内された。

会議室に入ると、王太后様の他に、宰相とクリフ様も同席していた。

「よく来てくださいました、レイビス様。私に話があると聞いておりますわ」

「お時間をいただき、ありがとうございます。話は、私の婚約者であるセリーナからさせていただきます」

皆の視線が、一斉に私に集まる。

「王太后陛下、もうやめにいたしましょう」

「……なにをやめると？」

いかにも高慢そうな表情で私を睨みつける王太后様の顔を、真っ直ぐに見つめ返した。

どこか挑戦するような眼差し。きつと、彼女は期待しているのだろう。

申し訳ないけれど、その期待には応えられない。

「このような茶番をです」

「茶番？ なにを言っているの？」

王太后様と宰相の顔色が、明らかに変わった。

「最初の違和感は、クリフ様です。私たちがこの城にやってきた時、クリフ様に会わせまいという意思を感じました。舞踏会の時もそうです。宰相、あなたはクリフ様とお話ししようとする私たちを遮るような態度でした。それほど私たちをクリフ様から遠ざけてきたのに、舞踏会の夜、お忍びとはいえ簡単にクリフ様とお会いすることができました。本当に私たちとの接触を禁じるつもりなら、監視をつけていたはずです」

ミリアナも、自由だった。宰相の娘だからとも思っただけれど、宰相の目的がクリフ様と私たちを会わせないことならありえないことだ。

他にもないミリアナが私たちに『クリフ様を助けて』と願った。

二人が想い合っていることを知っていたなら、笑顔を見せなくなったクリフ様をミリアナが心配することも十分に想像できたはず。

ミリアナが私たちにクリフ様のことを話すのは、むしろ彼らの計画通りだったと考えるほうが自然だ。

「陛下と密会なさっていたとは、驚きです」

「クリフ、どうということなの!？」

まだ演技を続ける二人。

「全て、計画だったのですよね？ 私たちがガレスタ王国を訪れた時から……いいえ、先王様がお亡くなりになった時から」

「やめなさい！ もうこれ以上は、やめて……」

王太后様は、懇願するように私を見る。

演技をしても無駄なのだと、観念したようだ。

「母上？」

クリフ様はなにが起きているのかわからず、不思議そうに首をかしげる。

「クリフ様、お二人はこの国、そしてクリフ様のために悪役になるおつもりだったのです」

クリフ様は、目を見開いて驚いている。

シェリルの手紙で、王太后様も宰相も、自分たちの派閥に疑問を持っていることがわかった。派閥といっても一枚岩ではない。その中には様々な思惑を抱いた者たちが蠢いている。

彼らの目的は、王太后派に権力を集中させることなんかじゃない。

むしろ、逆だったのだ。

この計画がうまくいけば、ミアアナも無事ではいられない。ただ、クリフ様なら命までは奪わないと考えていたのだろう。それでも娘に危険が及ぶことを承知で、宰相は計画をやり遂げようとしていた。父親としてではなく、宰相として国を守る道を選んだ。

それが国を背負う人間の覚悟なのだと思うと、切ない。

「もう一つの違和感、それはルドルフ殿下の毒殺未遂です。聞けば毒殺未遂と言っても、本当にお

粗末な犯行だった、と。もしかすると、この計画の目的はルドルフ殿下の排除ではなく、国にとつて邪魔な存在……つまり、自分たちの欲しか考えていない方々を道連れにするため、だったのではないですか？」

その後、ライトが詳しく調べてくれた。

わざわざ私たちの帰りを待ち、宰相が現れてメイドの話を遮る。そしてクリフ様がわがままを言っていると嘘をつき、ルドルフ殿下の毒殺未遂を隠す。最後に、ライトが私たちに毒殺未遂の話をする。

それで私たちに宰相への不信感を抱かせるのに成功したと確信したのだろう。

まさかその後、詳しく調べるとは思わなかったようだけれど。

関係者全員の口止めを徹底しなかった宰相と王太后様は、詰めが甘い。だがそれも、彼らが悪人ではないと判断する理由になった。

本当の悪人は、そんなに甘くはない。

ルドルフ殿下の食事に毒が入っているとわかったのは、給仕担当のメイドが突然毒だと騒いだからだそうだ。最初から、ルドルフ殿下を毒殺するつもりがなかったことは明らかすぎる。

そのメイドはもう自分で毒を入れたと自白している。おそらく時機を見て、王太后様と宰相の命令だったと話すことになっていたのである。

そして毒殺未遂の真犯人である王太后様と宰相は、クリフ様を利用しようとしている者たちの名を共犯として挙げる。それが、二人の目的だったようだ。

立ち読みサンプル
はここまで

「クリフ様を操り、この国を我がものにしようとした悪役として断罪される……それが、お二人の計画ですね」

「母上、ダベルン、どういふことですか？ セリーナの言っていることは、本当なのですか？」

「……」

クリフ様の問いに、なにも答えることができない王太后様。我が子を愛おしそうに見つめる彼女の大きな瞳から、涙がこぼれ落ちる。

「私たちもろとも古い世代のしがらみを消し、クリフ陛下とご兄弟が三人で協力して、国を守っていくことこそ、この国の未来に必要なこと……。セリーナ嬢、このまま計画通りに進めさせていただけませんか？」

宰相は深々と頭を下げた。

全てを賭けてまで遂行しようとした計画だ。そう簡単に諦めるなんて、納得がいかないだろう。それでも、こんなやり方は間違っている。

けれど私は、この国の人間ではない。判断するのは、私ではないのだ。

「クリフ様、どう思われますか？」

「セリーナ？」

急に振られて、クリフ様は困惑した様子で私を見る。

「この国の王は、クリフ様です。クリフ様のお考えに従います」

クリフ様はもう一度私を見てから、大きくうなずく。

「その計画を進めることは許さない。この国を守りたいと思うなら、未熟な僕を支援してくれなくて困る。僕には母上とダベルンが必要なんだ！」

クリフ様らしい判断で安心した。

宰相は、諦めたようにうなだれている。国王陛下の決断なのだから、受け入れるしかないだろう。

「セリーナ、これでいいかな？」

「はい。国王陛下の威厳げいげんが感じられました。ですが、せっかくですし……この計画、そのまま進めてしまいませんか？」

皆が一斉に首をかしげる。

「邪魔なものは、排除してしましましょう」

私の言葉に、皆、固まってしまった。また私に関するあらぬ噂が流れることになりそうだ。

宰相と王太后様の偽の計画……国を自分たちのものにするという嘘の話に乗ってきた者たちは、

確実に存在するのだ。

彼らはルドルフ殿下の殺害を本気で考えていた。たとえ宰相と王太后様の嘘の計画に乗せられたのだとしても、王族を殺害しようとしたことには変わりない。

道連れではなく、彼らだけをうまく排除できるならそれに越したことはないだろう。

「セリーナの考えを教えてほしい」

クリフ様は、覚悟を決めたようだ。たった数日で、こんなに成長しているなんて。

あんなにか弱かったクリフ様が、今は立派な国王に見える。